

No. 1

Date

「太陽風交点」に関する事実の経緯

大阪市大淀区豊崎5丁目5-24-702

作成者 堀 晃

作成日 昭和57年4月1日

1. 単行本「太陽風交点」の出版に至る事実の経緯

昭和52年7月29日(金)

午後8時頃、新宿で早川書房・今岡清氏と作家・山田正紀氏と会い、食事をしてあります。特に仕事の打合せではなく、私の勤務する会社(敷島紡績株式会社・当時の所属は技術開発部)の仕事で、東京都青梅市にある会社(梅花紡織株式会社)に出張した帰途、東京を通るため、顔も合わせることにしたものです。

この席上、「作品もたしかにたまってきたことだから、いずれ本にしましょう」という話を今岡氏の方から出て、

堀「そう出版もあせる訳でもないの?」
「こまめにまたのぞく、もっと作品をセレクトして、宇宙小説は“ネリ”一冊にした方がよくなる“ネリ”」

今岡「最初の作品集だから、カラーを出すためには、その方が“ネリ”もいれませんか」

堀「現在2作品は10篇ほどあるけれども、もっとセレクトした方が“ネリ”と思う」

今岡「では、宇宙小説は“ネリ”ハードカバーの線を進めよう」

といった話をしたことがあります。

昭和52年10月12日(木)

午後6時半、渋谷で同様に出張のついでに、今岡氏、山田氏と会い、新宿で食事をしてあります。なお、この時、早川書房・校正係の長坂美保氏が同席されてあります。

この時も、特に仕事の打合せを目的とした会合ではありませんが、主な話題は山田正紀氏の「長篇連載」と私のエッセイ連載についてであり、この時にも、前回同様に「宇宙小説は“ネリ”ハードカバー」という話が出てあります。

昭和53年3月16日(木)

SFマガジン1978年5月号掲載予定の「梅田地下オデッセイ」の原稿を送り、それを電話で連絡した際、今岡氏に対し、

堀「結婚も機会に作品集を出した」と思う」

今岡「では、5月中くらいに原稿を直して送ってみて下さい」

堀「6月21日が誕生日で34才になるので、それまでに送ります」と話してあります。

昭和53年6月6日(火)

「時間礁」(奇想天外 昭51年10月号掲載)、「電送都市」(別冊新評・昭52年夏号)、「迷宮の風」(SFマガジン 昭52年7月号)の3篇について、加筆訂正した原稿を同封し、他の7篇「イカサの翼」「暗黒星団」「最後の接触」「遺跡の声」「太陽風交点」「悪魔のホットライン」「熱の檻」については雑誌掲載のものを原稿とし、その段階で校正するという手紙を添えて、速達で発送しました。

昭和53年6月9日(金)

SFマガジン 昭53年8月号掲載予定のエッセイについて今岡氏より電話があり、この時、「作品集用の原稿は受け取りました。秋頃に発行になる予定です」という連絡がありました。

昭和53年8月21日(月)

SFマガジン10月の増刊号に掲載予定の作品「骨折星雲」を送りました。

昭和53年8月31日(木)

午後7時頃、早川書房・今岡氏に電話をし、9月上旬に送る予定であった連載エッセイの第9回分が、下記の理由により、書ける状態では無いという連絡を行ないました。

1. 9月上旬に会社の仕事で海外出張があり、帰国する予定が仕事の進行次第になるため、確定し無い。
2. 9月中旬にはじめての子供の出産が予定されており、しばらくは原稿の書ける状態では無いと予想される。
3. 10月末は会社の決算月に当たるため、どうしても会社の仕事が多忙になる。
4. 現在、自由国民社より発行予定の「世界のSF文学秘解説」に掲載予定の原稿が残っているだけで、それ以外の原稿は約束し無い。

なおなお事情で、9月、10月は原稿が書けないという連絡を行なったものです。

また、この時、作品集に関する話も出て、

今岡「先日送っていただいた『骨折星雲』も収録した方が……と思う」

堀「それは、『熱の檻』が時間行っちゃ、オレしちゃうの?」それを外に外りに『骨折星雲』を入れて欲しい」

今岡「それは、どうしよう」

といったやりとりがありました。

その後、この年、作品集に関する話はありません。

昭和54年1月28日(日)

作品集が発行される気配がある。また、私なりに自分の著書を持ちたい気持ちが強くなり、作家・小松左京氏に会った折、「ハードSFの出版は困難なおです」と相談したところ、小松氏から「早川から出る見込みがある場合は、どこか出版社を紹介しあげる」という話がありました。

昭和54年2月22日(木)

午後7時頃、今岡氏が電話があり、主な用件はSFマガジンの原稿に關することでした。その他に、連載「エッセイ」について、私のほうから、時間がある割にはおどろろ、最近シールが落ちてくること、自分でもわかるので、2月15日に発送した分で打ち切りにしたいという意向を伝えてあります。

その後、作品集の原稿を渡したままになっていることに触れ、

堀「早川が出版に乗り気でないようなら、原稿も引き上げた」

今岡「眉村卓氏の『消滅の光輪』の出版が遅れたため、それにともなう進行が遅れている。もう少し待つてほしい」

堀「大体いつ頃に発行されるのでしょうか」

今岡「夏には毎年、ハヤワ SFフェアという書店キャンペーンを行なうので、それに合わせて発行します」という話をしています。

昭和54年5月6日(日)

午後8時頃、今岡氏が電話があり（これは今岡氏の自宅からの電話）、

今岡「短篇集の4冊が出来たので明日送ります」

という連絡があり、つぎに解説について、

堀「これは小松左京氏に書いてもらいたければいい。忙しい人だから、書いてくれるかどうか」

今岡「堀氏のためなら書いてくれるでしょう」

堀「おとしい(5月4日)鏡明氏が大阪へ来られた時に小松氏に会ったところだった。連絡がもうおとし早ければ、その時頼めたのですが」

今岡「では、こちらから依頼します」

つぎに装丁について話をし、

今岡「角田純男氏に依頼してはどうだろうか」

堀「雑誌掲載時より加藤直之氏に依頼するところが多かったのでは、加藤氏にお願いしたい」

今岡「では加藤氏に話してみます」

つぎに、本のタイトルについて話題になり、

堀「『太陽風交点』というタイトルが気に入っているが、太陽風という言葉は一般的ではないから、デビュー作の意味で、『イカルスの翼』にするか、どちらにするかはお任せします」

と伝えています。

昭和54年5月12日(土)

短篇集の初校が郵便小包で到着しました。

昭和54年5月22日(火)

著者校正を終了し、速達で発送しています。

昭和54年8月6日(月)

小松左京氏の解説原稿のコピーが早川書房から送られてきました。

一読し、いくつか間違っている点も確認し、今岡氏に電話で連絡しています。

この時、今岡氏から、あとひと月くらいで発行にできるという点と、タイトルは「太陽風交点」で発行するという連絡を受けました。

昭和54年10月5日(金)

単行本「太陽風交点」の発行申込書を受け取りました。(市井(昌延))

昭和54年10月8日(月)

単行本「太陽風交点」が書店に並びました。(大阪、相屋書店で確認。)

2. 文庫本「太陽風交点」に関する事実の経緯

昭和55年12月12日(金)

午後8時頃、早川書房・細井恵津子氏より電話があり、

細井「文庫(『梅田地下オアシス』のこと)の発行の遅れに関することについて、事情説明のためお伺いしたい」

堀「おかしな話で、たまたま必要はありません」

細井「他に人々会う予定があるの？」

というわけで、12月21日(日)午後には来宅されることを約束しました。

この、「梅田地下オアシス」の発行の遅れについて補足的に説明しますと、

昭和55年5月2日(金)

今岡氏と翻訳家・伊藤典夫氏が、他の用件で来阪されたついでに来宅され、その時、

① 短篇「梅田地下オアシス」を中心に作品をまとめて、早川文庫で出版する。

② SFマガジンに連載したエッセイを中心に、他のエッセイ、非SF作品などを集めて

1冊エッセイ・ブックのスタイルで出版する。

の2件が話題になりました。

昭和55年6月17日(火)

①については、9篇について改稿原稿を、

②については、収録可能と思うエッセイのリストを作成し、そのコピーを、速達で発送しました。

昭和55年6月20日(金)

上記の原稿を受け取ったという電話が今岡氏よりあり、①については、作品の配列、解説、装丁について打合せ、「秋に出る」という話になりました。②については、現在も反応はありません。

昭和55年8月9日(土)

日本SF大会の会場で細井氏から「もうこの文庫(梅田地下オアシス)を出さないの？」

それに使用する顔写真が「たたまた」という話があり、「前にはSFマガジンの編集部で撮ってもらったものでありません」と答えています。

昭和55年9月1日(月)

「梅田地下オフェンセイ」の初校が届き、著者校正を終了して、9月5日に発送しています。

なお、甲第6号証の私信は、この時に同封したもので、数箇所訂正のうち、重要な二点について、その理由を説明したものです。

昭和55年10月16日(木)

今岡氏から電話があり、「『梅田地下オフェンセイ』の発行は遅れる。今のところ予定はたたまた」という連絡を受けました。

昭和55年11月5日(水)

今岡清氏と石原藤夫氏(『梅田地下オフェンセイ』の解説者)に手紙を書き、速達で発送しています。内容は、私の勤務が9月21日付で、技術研究所から特機事業所に所属が移り、解説のうち、仕事に関して不都合な部分が生じるため、遅れについて、間に合えば直してほしいと依頼したものです。

なお、今岡氏への手紙には、上記のような事情でスランプ状態にあり、雑誌の原稿がしばらく書けそうにないという連絡を書き添えています。

昭和55年11月27日(木)

今岡氏から電話があり、「梅田地下オフェンセイ」は年内に発行されるという連絡があり、ついで、同じ電話で、細井氏から、早川文庫で「冷たい方程式」というテーマのマンガを企画しており、私の「連立方程式」という作品を収録したいという打診がありました。これについては「冷たい方程式」というテーマには最近疑問を感じており、企画の意図がはっきりしないので、収録については、編者の伊藤典夫氏と相談して返事したい」と伝えてあります。

なお、このマンガについては、12月1日、伊藤典夫氏と電話で話し、テーマについての私の考え方を伝え、収録は見合わせたという意向を伝えてあります。

昭和55年12月4日(木)

今岡氏から電話があり、

今岡「『梅田地下オデッセイ』の発行がまた遅れることになった」

堀「なぜですか」

今岡「印刷屋に回ったより、予定がまたくずれなくなった」

堀「年内は無理ですか」

今岡「それもわかりません。印刷の方には問題ない合点ですか」

という連絡がありました。

以上のおな事情があり、細井氏が来宅されることになった訳です。

昭和55年12月18日(木)

伊藤典夫氏より午後10時頃電話があり、「『冷たい方程式』プロジェクトは企画が無期延期、実質的には中止になった。」という連絡があり、つづいて、「『梅田地下オデッセイ』の遅れをどうごまかしていらっしゃるのか、一度事情説明に行っておいた方がいいと細井さんにアドバイスがあった。彼氏は自費で行くのだから、どうもこれで応待しておいてほしい」という話がありました。

昭和55年12月21日(日)

午後2時5分、細井氏より電話があり、「新大阪に着いたのだ、これから伺います」という連絡があり、私の妻が地下鉄・中津駅まで迎えに行き、午後2時半頃来宅されました。

堀「かしこい、あれでいいんだ、恐縮です」

細井「大阪にいる友達に会う用事もあるの、寄せていただきました」

とおいづりました。

また、妻の好物ということで、神田・淡路亭のせんべいもみやげにいただきました。

なお、以下の話には、リビング・ルームであつたため、妻と当時2才3ヶ月の長男が同席にいます。

しばらく雑談の後、まず「梅田地下オデッセイ」について、

細井「文庫出版の担当は私で、今岡ではありません。ただ、今岡の方が雑誌の件などで話せることが多いと思ひ、連絡を依頼しておりました。連絡がこまめに来なかったのは知りませんでした。今後、『梅田地下オデッセイ』については私の方が連絡します」

といわれ、次に、入稿以来の進行日程をメモした紙を出され、経過を説明されました。

内容は ①初校までは予定どおり進行していた。

- ② 解説が予想以上に長いものに存在したため、ページ数が変わった。
- ③ 解説の変更があったため、さらに遅れた。
- ④ 図版が多く、特に2冊が遅延の原因となった。
- ⑤ 何十冊の本が同時に進行しており、ついで連絡が来るようになった。
- ⑥ 日程としては56年1月中旬に発行される。

というもので、私は事情を了承しました。

つぎに、11月27日に連絡のあったペンロジの件について、

細井「あの企画は中止することになりました」

堀「その件は、先日伊藤さんから聞きました」

という話をしております。

以上の話を約30分くらいであり、あと、私はビールを飲みながら、雑談をしております。

話の内容は雑多であり、順不同で思い出すまま書きますと、

妻が早川書房に勤務していた時の知り合いの近況、消息など。

今岡氏の私行上の問題を東京では何と噂にのぼり、細井氏が早川の社員として、出先で色々な人からそれをたずねられるため、仕事もやりづらく困っているという事。

私の作品集「エネルギー救出作戦」が発行されたばかりであること。

SF作家・荒巻義雄氏が個人的に選んでいる「あまぎ賞」に私の作品が選ばれ、賞品の新巻鮭が届いたばかりであること。

友人の作家の近況。

などに ついで 話しております。

このような雑談が1時間ほどつづいて途中で、細井氏が思い出したように、

細井「と32、『太陽風交点』の文庫化の予定は決まっていますか」

堀「今のところ、別にありません」

細井「もしよければ来年の秋頃に早川文庫に入れたらいいと思っていますが」

堀「まあ、それはわかりませんが、その場合は装丁や解説は変えた方がいいでしょうね。解説は、時機がくればかんべい（かんべい氏）あたりに頼んでみるかなあ」

といった会話を交しております。

その後、30分ほど雑談し、

細井「5時に新阪急ホテルのロビーで人と待ち合わせしているの？」

という事で、午後4時30分に帰りました。

妻が途中で送っております。

3. 日本SF大賞 受賞後の事実の経緯

昭和56年1月14日(木)

午後7時半頃、第1回日本SF大賞 受賞の連絡が電話で来ました。

星新一氏から受賞の連絡があり、同じ電話で選考委員の各氏からひと言ずつ祝いの言葉がありました。

同夜、徳間書店・菅原善雄氏から授賞式についての連絡があり、同社・石井紀男氏から、「SFアドバンサー」誌に載せる「受賞の言葉」についての連絡がありました。

昭和56年1月17日(土)

午後5時頃、大阪のフラガホテルで小松左京氏と食事をしております。(おんべあとし氏など、他の方も同席)

主な話題は、受賞の祝いでしたか。この席上、「早川から何か聞いてきたか」という質問があり、

堀「何も連絡はありません。受賞作はほとんど店頭になし、増刷の話もありません」と答えております。

昭和56年1月19日(月)

徳間・久保寺達氏から電話があり、

久保寺「早川から増刷などの話はありますか」

堀「おたくありません。今年の秋頃に文庫にしたという担当者の打診は以前にありましたが、ずいぶん先の話になりますし、受賞作についての問い合わせもあるのですが、本屋にならなくて困ります」

久保寺「受賞作が書店に並ばないようであれば、徳間文庫で3月に発行することを検討しているのですか」

堀「ありがたい話ですが、時間的に大丈夫でしょうか」

久保寺「他の予定と入れ替えてでも進めます。とりあえず出版の意志を確認したいので、仮契約書を送ります、検討して下さい」

といった話をしております。

また、早川の担当者が細井白川であることも伝えられます。

昭和56年1月22日(木)

徳間書店より文庫の打診が来ていることは、個人的に細井氏に伝えておいた方が
いいと思い、会社の勤務の都合上、届間は私が電話連絡できるため、
前記のような内容も妻に伝え、妻が細井氏に電話してあります。

01 21 11

また同日、午後7時、朝日新聞大阪支社学芸部の大上朝美記者が受賞に
ついでインタビューに来宅されました。この時の話は、

「受賞作は書店も5、6軒しか売れていないが、見当が、書店で問合せて在庫
はないというでした。受賞作は図書館でSFマガジンのバックナンバーをコピーして
読みました」ということでした。

昭和56年1月23日(金)

午後11時半頃、細井氏から電話があり、

細井「徳間より文庫を出したいというのですが、先日、早川文庫の件で話している
はずですか」

堀「あなたとの話の内容は徳間書店の方へ伝えてあります。徳間の方からいって
あつたはあると思います。担当者としてあなたの名前を伝えてくれるので、急な話
で混乱するといけないと思い、個人的に連絡したわけです」

細井「契約書に印鑑は押さえていますか」

堀「まだ届いていません。私としては、徳間からこのお話を来ているというこ
と、作者として徳間文庫に入ることを希望していること、個人的に細井氏に迷惑を掛け
ることを心配しているということを伝えたいたけれど、早川書房に対する申し入れという
電話ではありません」

細井「しかし、問題は重要ですから、会社で会議を開いた上で返事します」
といった話もしています。

昭和56年1月24日(土)

徳間書店より仮契約書(2第1号証の1)が到着しました。

また、同日、午後、神戸新聞社・社会部 石井幸夫記者がインタビューに来宅され
た時「受賞作が本屋にないの、と、なぜ本が見せられない」と話されています。

また、同日夕方、共同通信社・記者・川崎俊弥氏がインタビューに来宅され、
同様に「受賞作も本屋で買えない、ない」と話されています。

昭和56年1月26日(月)

午後10時半頃、細井氏から電話があり、「先日の件は了解してまいることが会議で決まりました」という連絡がありました。

公衆電話からの連絡らしく、約20秒で切れました。

昭和56年1月28日(水)

大阪のプラザホテルで「小松左京50才を祝う会」が開かれ、この会場で徳間書店・前島不二雄、菅原善雄両氏から「早川書房の今岡氏から、徳間に対し、『太陽風交点』の文庫出版は認められたい」という主旨の手紙が届いている」という話を聞きました。

これに対し、私は、細井氏との話の内容を伝え、「打診はあいたが、契約を交した覚えはない」と話しております。

また、この時点で、仮契約書に印鑑は押してありませんでした。出版契約書に接するのは初めてであったため、その内容について説明を両氏から聞き、納得しております。

また、同日、同会場で今岡清氏とも顔を合わせておりますが、雑談をしたのみで、文庫等に関する話は11分ほど出ております。

昭和56年1月29日(木)

徳間文庫の仮契約書に調印し、発送しました。(乙第1号証の1)

また、同日夜、徳間・ス保寿氏と電話で話し、秋頃に早川で文庫化した希望を細井氏が持っているという先日の話をくり返し、具体化した場合は細井氏の希望を尊重してあげてほしいと伝えております。

昭和56年2月5日(木)

日本SF大賞授賞式のため上京しました。

この日、午後2時半に徳間書店を訪問し、文庫版「太陽風交点」の最終的な校正を行いました。

同日、夜、授賞式に、今岡氏も来場しており雑談しております。文庫出版に関する話は出ておりません。また、細井氏も来場しておりました。話をする機会はありませんでした。

昭和56年2月17日(火)

午後7時半頃、今岡清氏から電話があり、

今岡「『太陽風交点』を早川文庫で2月28日に出すことになる」

堀「え、そんなこと出来るのですか」

今岡「写真に撮ったものを縮小します」

堀「しかし、あまりにも急な話なので、どう返事にいいか困ります。とりあえずそんな話
がきたことだけは確かに承知しておきますが」

と話し合います。

昭和56年2月18日(水)

徳間・久保寺氏と前日の電話について相談しました。

この結果、日程を考慮してそのようなことが10日間ではできるとは思いますが、もし
進行中だとすれば、誤植を直して11本が出してしまうことになるので、中止を考えた
方が111ということになる、内容証明で送ることに決めました。

昭和56年2月19日(木)

今岡清氏宛の内容証明郵便を発送しました。(甲第1号証)

内容証明を書くのは初めてのことで、つたな文章になっていますが、主旨は

- ① あまりにも急な話で了解し難い。
- ② 文庫の担当者は細井氏と聞いていたもので、このような連絡で困惑している。
- ③ 細井氏の話については道義的に配慮しているつもりです。
- ④ 著者校正、装丁、解説について111Eに相談のなり出版など信じられな。

という内容です。

昭和56年2月25日(水)

上記の年紙に対する返事が届きました。(丙第3号証)

昭和56年2月26日(木)

今岡氏の返事が、私の発送した内容証明の内容を誤解しているの2、再度、
内容証明郵便を今岡氏宛に発送した。(甲第2号証)

主旨は

- ① 契約を交した覚意はなし、どういふものなる、内容を提示してほしい。
- ② 著者校正のなり本は絶対に出すなといふ。

の2点です。

昭和56年2月27日(金)

早川が文庫を作成していることについては半信半疑でしたが、正式の出版申し込み書が届いたため、あつて3通目の内容証明(甲第3号証)を送りました。(7)

前の2通が今岡宛宛であつたため、早川書房の責任者(これが誰かあるか、またかわるかわかりませんが)に届いているのではなからぬ心配になり、また文庫出版の担当者が今岡宛宛の不細かなものも返事がなかったのにかわらず、そのため同じ内容の手紙を「早川書房」宛に送ったものです。

同日午後11時頃、小松左京宛電話があり、

「夕方、早川の桜井専務と今岡氏が事務所を訪ねてきた。用件は、文庫を作ってしまったので、何とか出せるように調停してほしいという申し入れだった。と、いいます。明日(28日)に出すという話は延期することになった。」

という連絡を受けました。

昭和56年3月7日(土)

一応早川文庫の出版は延期された気配でしたが、もし書店に流れるようなことがあれば、至急出版を差し止める必要があり、弁護士への委任状と文化庁への登録に必要な印鑑証明を徳間書店宛に送りました。

昭和56年3月11日(水)

昼間、早川・今岡氏から私の妻に電話があり「午後7時頃に電話をかけるが、20時電話に出ないと、告げに踏み切る」という伝言がありました。妻が驚いて勤務先へ電話してまたため、小松左京氏に連絡をといたところ、

「明日(12日)徳間、早川と三者で話し合うことになる。」

という話を聞き、

堀「私は勤務の都合で上京できませんが、全権を委任いたしますので、よろしくお願いします。」

と伝えています。

同日、午後7時頃、今岡氏から電話があり、

今岡「お間玉かもしれませんが、明日、小松氏を混えて、徳間と話し合いを行ないます。結果がどうなるか、またかわりませんが、和解が成立した時には印鑑が必要になるので、印鑑を小松氏にあずけてほしい。」

堀「今届くものは物理的に無理です。ただ、小松氏の裁定にはおつて

従うと、小松さんにも伝えておいて、決定に異を唱えることはしません」
今回「どうなるのか、ほくにはまたわかりませんが、まずはそのように会社に伝えませう」
という会話を交わります。

昭和56年3月13日(金)

徳間書店・前高不二雄 へ連絡があり、早川との会談の結果、早川が用意した
協定文書の内容を、小松さんにも徳間にも伝えて了承してもらうものではなく、
関係者が承認し得るような文書の作成を 徳間・早川両社の弁護士が
行うことになった。という事を知りました。

昭和56年3月23日(月)

午後1時頃、勤務先に 徳間・久保幸白 へ電話があり
「早川が今回の経緯をSFマガジンに発表する。それだけでなく、今日、午後にも記者発表
し、告訴するといっている」

という連絡を受けました。

結局、作者としては、譲れない線として

① 「堀晃の違法な複製出版契約」という文章は認められない

② もし早川の文庫が出るのであれば 正誤表をつける

という条件を出し、早川の返事を待つことにしました。

昭和56年4月15日(水)

午後7時半、読売新聞の記者からの電話で今回の提訴を知りました。

以上